

成り上がる勇者と希望を照らす戦神

神炎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シエハムとの戦いから月日が経ち

光の戦神ゼロⅡ雪音白夜は研究をしていた

だがその息抜きに図書館である一冊の本を手にする

## 【四聖勇者】

それは剣・弓・槍・盾の勇者が波という驚異から救う物語

だがそこに盾の勇者に関する記述はない

その時突然光に包まれ召喚された

雪音白夜は光の勇者として召喚される

新たな世界で雪音白夜はどのような物語を描くのか

※自己満です

それでも良いという方はどうぞお読みください

目次

プロローグ	1
奴隸と波【前編】	25
奴隸と波【中編】	45
奴隸と波【後編】	62

## プロローグ

ある日……また強制移動させられた  
と言うのも

別世界について研究をしまとめた後息抜きで図書館に行った時  
だった

「(俺の知らない聖遺物や人物は多くある。色々知らないとな)」

そんな事を思いながら探していくと一冊の本に目が止まった  
俺はそれを手に取った

「?……『四聖勇者』?この本によると……四聖勇者は剣・弓・槍・盾  
の勇者がいる。盾?……守り専門の勇者か?」

剣・弓・槍についての記載はあったが盾は無かった  
おかしい……何故盾についての情報がない?  
その時

「え?」

手に持っていた本が光だした

「……まさか……」

予想通り……俺はその場から消えた  
何処かに飛ばされたのだ

目を開いた

そこは召喚部屋だった

「(はあ……めんどくさ。また下らん神共の仕業か？だとしたら潰  
そ)」

すると

？「なんだ？」

？「ここは何処ですか？」

俺からして左側には俺以外に4人いた

？「ようこそ!!勇者様方！」

「?勇者…」

目の前には何人かいた

そいつらにこの国の王様の元へ案内すると言うので大人しくついてった

### 国王の部屋

オルトクレイ「おおよく来た勇者達よ。私はオルトクレイ・メルロマルク…この国の王だ」

「王か……すぐに気付けず…謝罪を（敬意は示しておくか）」

俺は膝立をしてお辞儀をした

まあ元騎士ですから?

オルトクレイ「四聖勇者達は分かるが……貴殿は?」

「あれ?……どの勇者か知っていたのでは?」

オルトクレイ「いや……貴殿の様な勇者は……っ!?まさか伝説と言

われた……」

「？伝説？（まさか外伝版がある？……頼むから面倒なのはやめて）」

その思いは裏切られる事に

オルトクレイ「光の勇者か！」

勇者4人「えっ!？」

「……あのー……王様？」

オルトクレイ「どうした？」

「それって……マジで？……俺をはめる嘘とかでは？」

オルトクレイ「いや！真実だ。疑うのなら書斎を読んでもらっても構わん」

「………分かりました。取り乱してしまい申し訳ありません」

取り敢えず謝った

まあ真偽は後々でも分かるし

その後各々自己紹介が始まった

奥から剣を持った男

多分剣の勇者かな

あいつは『天木錬』

年は16歳

次に弓の勇者

こいつは『川澄樹』

年は17歳

槍を持った勇者

槍の勇者の名は『北村元康』

年は21歳

次に俺の隣にいる盾を持った男

盾の勇者の名は……と何故か聞かず俺になった

?……………この男になった時の空気が変わった……

オルトクレイ「次は光の勇者……貴殿の名は？」

「私は雪音白夜。年齢は……言っても信じないだろうから言いません。俺は信じたものの為に戦い……守る。これからよろしくお願ひします……この国の王……オルトクレイ・メルロマルク王よ」

まあこんなものかな？

オルトクレイ「よし……………これで皆言った」

?「あ…あのー王様？俺は？」

オルトクレイ「?……………っ！おう忘れておったすまない」

あの場で忘れるか？

何か怪しいな……

で……スルーされたこの男に

盾の勇者の名は『岩谷尚文』

俺達は部屋へ案内された



## 王城の部屋

「綺麗に手入れされてるな……（あの感じ……何かある）」

槍の勇者元康から話が始まった

元康「んじやあ自己紹介を……てしたか。しっかしこの世界はゲームなのか？」

樹「現実っぽいですけど」

現実？ゲーム？

VRMMOの事を言ってるのか？

てか現実だろ

そんなの……てか分からんか

各々確認の為色々話した

結論としては

全く別世界から来たらしい

まあ俺もだが

「皆は各々の世界で別々のゲームをしている。それと総理もバラバラ……そりやあ合わんわけだ」

元康「雪音はなんで歳を言わなかったんだ？」

「言っても信じないだろ。そんなのは普通あり得ないからな」

鍊「まあ言いたくないならいい。何処かで言ってくれるだろ？」

「悪いな鍊さん」

鍊「鍊でいい。雪音」

「俺も下の名前でもいいよ。その呼び方だとちよつと」

鍊「わかった」

「明日もあそこに行かないといけないみたいだし。もう寝るか」

樹「そうですね。皆さんの話が聞けて良かったです」

元康「だな！」

元康達とその場を別れた  
が

「そう言えば隣同士だったっけか」

尚文「あ……ああ」

岩谷尚文……盾の勇者か

あの場では言わなかったけど盾には盾の良いところがある  
皆を守る鉄壁の壁

「あの話を聞いてショックだった？」

尚文「まあな……盾が外れって。予想はしてたし。盾は役にたたな

いからな」

「そんな事ねえよ。盾はただ守るだけじゃない。防御力を攻撃に転換させるものもある。それとカウンター系の攻撃だってある。まあ何かあつたら俺が面倒見るよ」

尚文「……………白夜……………ありがとう！」

「明日も早い。もう寝よう」

尚文「また話を聞かせてくれよな！白夜!!」

尚文は自分の部屋に入った

「盾の勇者……………何故あんなに毛嫌けいいをしているのか。調べる必要があるな」

四聖勇者に書いてあつた本でも盾の勇者について書いてなかった  
絶対何かある

俺は同時平行で明日の為に寝た

翌日

俺達は昨日の王のいる部屋へと来た

今回集まったのはパーティーを組むという

なんとゲーム的な流れ

鍊・樹・元康には仲間が行き尚文はというと

何故かいない

え？俺？

俺は1人でも大丈夫だからいいよと言った

だがと言われたので俺は尚文と共に行動する事にした

でも勇者同士ではと女性が名乗りをあげパーティーに入った

女性の名は「マイン」

なくんか裏あるんだよなあ

まあどうせ後々わかるんだけど

俺達は野原にいるバルーンのモンスターと戦った

尚文「はああ！」

尚文は盾が無い方でバルーンのモンスターに殴った

「まあ…うん……………わかってた」

倒した

経験値＋1

だがあまり経験値が貰えなかった

マインはというと筋がよかった

次に俺

「さてとやるかな」

尚文「？白夜は武器はないのか？」

「あるにはあるけど……………武器無しが俺の基本スタイルなんだ」

尚文「格闘系の勇者ってことか」

「(いや……………一応剣・弓等使えるけど……………)」

俺はバルーンのモンスターに向かっていった

「ゼロ」

いつもの言葉を言った

すると身体中に白銀の鎧を纏った

まあ最小限の大きさであとは普通の服と合わさった感じ

「いきますか。……………インパクト！」

バルーンのモンスターに向かって右ストレートをぶちかました  
モンスターを倒した衝撃で風圧が前方50Mも発生した

「あんまかな」

すると

経験値＋15

「あれ？」

尚文とは経験値が多かった

盾の勇者が故の経験値獲得数値なのか？

そんな事をしていて突然経験値が貰えなかった

だがすぐ解けた

何故なら他の勇者がある程度の距離近づいたら経験値が入らない

という事

でも俺は？

例外なのか？

そんな事をしていると

「防具とか買った方がいいな。いつまでも初期装備って訳にもいかねえし」

尚文「そうだな」

「マインさん。何処か防具とか買える所はありますか？」

マイン「良いところがあります。そこに行きましょう」

案内された防具屋に向かい買い揃えた

その後飲食店に入り食事をした

俺は早めに食べ終えた

「マインさん。何処かこの世界についての本が多くある所はありますか?」

マイン「本ですか?……それならば王宮にあります。そこに言ってみればいかがでしょうか?」

「わかりました。では俺はここで。尚文また明日な」

尚文「ああ……おやすみ」

俺は王宮にある書庫へ向かった

王宮書庫

俺は四聖勇者についての本を読み漁った

剣・弓・槍については詳細にあるのに何故か盾について書かれていない

俺は気になり王宮にいる人達に聞くことに

「あのー……聞きたい事がありました」

王族1「何でしょう光の勇者様」

「盾の勇者についてなんですが」

王族1「っ!?……盾の……勇者ですか?何故?」

「盾の勇者のみ殆んど情報が無くて……知りたいと思ひまして」

王族1「い……いやあ……知りませんね」

「四聖勇者について知っているんじゃない?」

王族1「盾の勇者様だけ曖昧で……すみません!それでは私はここで」

王族はその場を離れそうとした  
だが俺は逃がすつもりはなかった

「待てー!」

王族1「っ……はい?」

「本当に知らないのか?」

王族1「はい」

「ほう……嫌っている……の間違いじゃないのか?」



王族1 「っ!？」

やっぱりな

「まあいい……………それならそれで構わない。だがな」

俺はゼロを発動させた

「見ず知らずの人間に向けるものじゃねえ！盾だからと言う理由で見下すな!!……………後々後悔するぞ」

俺は自分の部屋に戻った

あるものを尚文の部屋へと設置した後

翌日・朝

「はあー！」

俺は日の出前に身体を動かしたいた  
すると

？「光の勇者様でしょうか？」

「はい。兵士の皆さんが俺に何の用で？」

兵士「説明は王様のいる王室でお話しますので」

「……わかりました。他の勇者の所に行つてあげてください。すぐに  
王室へ向かいます」

兵士「ですが？」

「いいですから……早く行つてあげてください」

兵士「わかりました」

俺はすぐに王室へ向かった

他の勇者はまだいない………あらかた聞いてやる

王室

ガチャン！

「おはようございます王様」

オルトクレイ「ハクヤ殿か。しかし早いな」

「早い方が良いかと思ひ。それに」

オルトクレイ「それに？」

「聞きたい事もあったので」

オルトクレイ「なんだ聞きたい事とは？」

「盾の勇者の事です」

オルトクレイ「っ」

やっぱりな

空気が変わった

オルトクレイ「盾の勇者か……………それについては後で言うつもりだ」

「冤罪について……………ですか？」

オルトクレイ「っ……………」

「マインさんが尚文に罫をかけたどん底に突き落とす。何のつもりですか？」

すると他の勇者が来た

「あいつは何もしていない!!それは明らかだ!!」

鍊「白夜?」

元康「どうしたんだ白夜?そんなに声を荒げて」

俺は元康達を見た

そこには

「やっぱそうか」

マインがいた

「予想はしていた。その予想は今確信に変わった。……………追放させるつもりか?尚文を!!」

オルトクレイ「っ!」

マイン「ハクヤ様!私は盾の勇者様に襲われたのです。それも深い心の傷を…………」

「よく言えるよなあ……………汚え女王候補が!」

マイン「っ!?ハクヤ様!……………知っていたんですか?王族という事を?」

「王と雰囲気似ていた。だと思ったんだ。まさか王族ぐるみで尚文を攻撃なんぞ……………良くできるな?」

すると

元康「ちよつと待て！白夜！」

「なんだ？」

元康も勇者……それぐらいはわかつた

元康「マインの言っている事は本当だ！マインは尚文に卑劣な事をさせられたんだ！」

は？

予想外だ

尚文が悪いと？

俺はブチギレモードに変わった

そこに丁度尚文が来た

「おい槍」

元康「は……白夜？」

「そんな事もわかんねえのか？てめえは!!!」

怒りに任せゼロを発動させた

「てめえが勇者？笑わせる！てめえみたいなのが勇者なんぞ認められねえんだよ！」

元康「なんで白夜が俺に怒るんだ？怒るなら尚文だろ？」

尚文「は？ちよ……元康何を？」

「尚文……簡単にいう。お前ははめられたんだ。王族にな」

尚文「……え？」

「こいつらは盾の勇者が大っ嫌いらしい」

尚文「………嘘だろ」

「まじだ。だから俺はお前と別れた後にこの世界について調べた。確信したのはついさっきだけだな」

尚文「なんだよ……俺が盾だからなのか？」

「尚文……お前はどすする？」

尚文「………俺は」

「俺と来い！」

尚文「白夜……」

オルトクレイ「駄目だ！ハクヤ殿が盾の勇者と一緒にには」

「黙れ！」

全員「っ!？」

「たかだか人間の王が俺に問うな!!裁かれないか？」

尚文「白夜……なのか？」

「あっ……（しまった!?戦神の時の雰囲気をやっちゃまった〜）」

元康「……………今の雰囲気は」

「行くぞ尚文!」

俺は尚文の側に行つた  
すると

兵士2「行かせません!光の勇者様!」

シユン!シユン!シユン!シユン!シユン!シユン!

兵士の目の前に大きな剣が床に刺さつた

「串刺しになりたいか?」

尚文を抱え外へ出た

外

「ふう……裏路地に入ったな」

尚文「白夜……なんで助けた？」

「信用なんねえか？」

尚文「……まあ……白夜もかなって思って」

「なら契約するか？」

尚文「契約？」

俺は左手の甲を見せた

尚文「なんだそれ？」

「ある者を使役する力だ。これをお前に分ける」

すると尚文の右手の甲に似たような模様が

尚文「っ!？」



『令呪』……俺はそう呼んでる」

尚文「令呪」

「試しに使ってみろ。そうだな……信頼を勝ち取れ………とかにするか」

尚文「……わかった………えっと」

「使い方か?……俺の後に続いて言ってくれ」

尚文「ああ」

「令呪をもって命ずる」

尚文「…令呪をもって命ずる!」

「雪音白夜……俺から信頼を勝ち取れ!」

尚文「雪音白夜!俺から信頼を勝ち取れ!!!」

すると尚文の持つ令呪が光った

その時

「うっ?!?!?!?!?!」

予想以上に強力だった  
だがすぐ収まった

尚文「大丈夫か?」

「ああ……まさか強烈なのが来るとはな」

尚文 「普通なのか？それが？」

「こんなの滅多いない………てか0に近いぐらい強力だ。こんなの受けた事無い」

尚文 「そうなのか」

「たぶんだが……勇者だからかもな」

尚文 「俺だから？」

「勇者は他よりも強力だ。だから令呪も強力な力を発揮したんだ」

尚文 「……………」

「後々信じてくれればいい。……裏切られるのは慣れてるからな」

尚文 「？……今なんt」

「さてと……まずは資金集めだな。忙しくなるぜ!!」

あの戦いから月日が建ち……俺はまた別世界へと飛ばされた  
今度の世界は勇者を召喚する世界

だがそこでは盾の勇者は憎まれる

そんなとばつちりを受ける 『現盾の勇者【岩谷尚文】』

そんな盾の勇者の手助けをする 『光の勇者又の名を光の戦神【雪音  
白夜】』

この2人のプロローグは最悪な1ページから始まる

【成り上がる勇者と希望を照らす戦神】  
どの様な物語になるのか

## 奴隸と波【前編】

「お前は どうする？ ……しばらく一緒に行動するか？」

尚文「いや…今は一人でいたい。誘ってくれるのは嬉しいが」

「そっか。いいよ！俺は気にしてないから」

俺は表通りに行こうとした

尚文「白夜！」

「うん？…なんだ？」

尚文「えつと…ありがとな。庇ってくれて」

「人助けだ。気にすんなって！またな！」

今度こそ表通りに向かった

尚文「白夜…光の勇者か（優しいんだな…白夜は）」

尚文と別れた俺は野原にいた

「はあああ!!」

この世界で自分が使える技を試していた

ゼロ／戦神で使っていた力

これは初日で使えてたから問題ない

投影魔術／これもだが1つ疑問

何故かアーチャーだった時に着ていた赤い服を纏っていた

今まではそんな事なかったのだ

約束された勝利の剣／これは使う事が出来なかった

そう言えばスキルが確認できる項目があったな

見てみるか

「えっと……っ！これか！」

【投影魔術】 使用可能

【ゼロ】 使用可能

【約束された勝利の剣】 使用不可

それとノイズの様なもので隠されているものがある  
なんだ？これは？

「(なんの項目だ？……後々わかるかな)」

とりあえず確認が出来たし……休憩するか

俺は王都の質屋へ向かいこのバルーンのモンスター………そう  
言えばオレンジバルーンって言ってたか

これ売る質屋にでも行くか

ついでに道具など買いに行くことに

質屋

店主「ふう。悪魔が」

その時丁度尚文がいた

声をかけようと思ったが今は1人にしておいた方がいい  
そう思った

「喧嘩でもしてたんですか？」

店主「おう！光の勇者様！売りに来たんですか？」

「（この反応。あのくそ王はあんな俺でも手放したくないと。光の勇者か………これは念入りに調べないと。四聖勇者より）まあ……オレンジバルーンなんだが……いくらなんだ？」

店主「オレンジバルーンがこんなにも!？」

「数では40体倒したかな」

店主「そんなにですか!? いやはや! 光の勇者様はお強いんですね」

「その光の勇者って一体?」

店主「伝説では四聖勇者が倒せない強敵を光の勇者様が倒してくださるんです」

「つまり汚れ仕事?」

店主「いえいえ! そうではなく。確か…相手は最強の神とか」

「最強の神?...それって邪神って付くんでは? 最強の邪神って」

店主「はい...よくわかりましたね。その邪神と戦う者が光の勇者様なんです。あつ! でももう1人いましたね。確か...闇の勇者と」

「闇の勇者!? (まさかあいつが...たぶん前の光と闇の勇者だろう。行くのは嫌だが聞いてみるか)」

闇の勇者...あいつがこの世界にいればいいが

それと邪神...絶対あいつだな

「それで金額は?」

店主「ああ!! そうでしたね。銅貨20枚です」

「ありがとう。縁があればまた」

店主「はい。またご利用を」

俺はその後こそ王のいる王広間へ

王広間

「邪魔するぞ」

オルトクレイ「ハクヤ殿か。何用だ？」

「本当は来たくなかったが。……聞きたい事があってね」

オルトクレイ「なんだ？」

「邪神と闇の勇者について」

オルトクレイ「聞いたのだな」

「早く終わらせた。邪神の名前は知ってるか？」



オルトクレイ「名前か……確か……『アトロシマス』と言ったか」

「っ!?アトロシマスっ………本当にアトロシマスなんだな!!!」

オルトクレイ「あ……ああ」

「(この世界に言われている邪神が俺の知っているアトロシマスなら………まずいつ)」

オルトクレイ「あとは闇の勇者だったな。すまぬが闇の勇者は余ではわからぬ。居たとは思うが」

「そうか」

俺は知れる限りの事を聞き出した

俺は外へ行こうとした時

オルトクレイ「ハクヤ殿！」

「なんだ？」

オルトクレイ「『龍刻の砂時計』は行ったか？」

「いや………なんだ？龍刻の砂時計ってのは？」

オルトクレイ「次の波やクラスアップをする場所だ。行ってみるといい」

「何故だ？………尚文を庇った。何故だ！」

オルトクレイ「貴殿は別だ。あの盾とは関わない方がいい」

「ふざけるな。あん時も言ったが……俺は守るものを守る。手なんか組むか」

オルトクレイ「それでも構わん。ハクヤ殿が波に対抗してくれれば」

「……………勝手に期待してろ」

俺は念の為龍刻の砂時計へ向かった

龍刻の砂時計

「……」が……龍刻の砂時計」

俺は室内へと入った  
奥に進むとでっかい砂時計があった

「すごいな……」

すると

シスター「光の勇者様ですか？」

「ああ。王様が1度言ってみてはって言ってたから来たんだ」

シスター「そうですか。……見る限り伝説の武器は無いようですか？」

「武器？……ああいつらが持ってた剣や槍とかのか？」

シスター「はい」

「光の勇者の武器……試してみるか。ゼロ」

ゼロを発動させてみた  
すると

「なんだ？」

龍刻の砂時計から左手首に付いている高性能の腕時計に光が射した

「上に書いてある時間。これなんだ？」

シスター「それは次の波が起こる時間です」

「(戦いが起こる時間ね)そうか。あとクラスアップつてのが出来ると聞いたが」

シスター「クラスアップは勇者様が連れてくる仲間マークが付きます。そのマークが出ましたらその方はそれ以上強くなりません。いわば上限に達したという意味です」

「そのマークが付いたらここに来ればいいんだな？」

シスター「そうです」

「ありがとう。その時が来たら来る」

そう言い俺はゼロを解き龍刻の砂時計を後にした

日は落ち夜に

何もやる事がなく狭い路地を歩いていた

「色々と聞いた。だが重要な事は……邪神はアトロシアスなのかどうか。もしそうなら早くあいつを見つけねえと」

すると

キイイイイン！

光を発した

なんだ？

俺は光の方へ向かった

チンピラ「くっそー」

？「防御力はあるても攻撃力が足りない：足りないから魔物を倒せない：倒せないから経験値が稼げない：稼げないからいつまで経っても攻撃力が上がらない：嫌なループだ：くそっ！」

「尚文？何やってんだ？」

光の主は尚文の盾だった

尚文「白夜：朝ぶりだな」

「オレンジバルーン？……そうか」

尚文「聞かないのか？」

「現状お前は結構やばいし……そう取るとは思ったよ」

そんな話をしていると

「誰だ!!!」

俺は後ろを向いた

? 「流石光の勇者様……気付かれるとは」

尚文 「白夜いつから?」

「この路地に入ってからだ。ずっとつけられてた。で何の用だ?」

? 「見た所人手が足りないようで。よい話がありますよ?」

尚文 「仲間の斡旋なら間に合っている」

? 「光の勇者様は?」

「……特に決まってるないな」

? 「そうですか。ですが私が提供するのとはそんな不便な代物ではありませんよ」

尚文 「じゃあなんだ?」

『『奴隷』……だろ?』

尚文 「っ!……そうか奴隷商人」

奴隷商人 「お二方……いい目をしていますね」

「なんで俺もだ?」

奴隸商人「なんでですか？……それは………貴方は信じた者に何  
度も裏切られている。そんな目を持っていますよ」

尚文「……………（白夜が……………何度も？）」

「で……………奴隸を買わせようと俺達に近づいたと？」

奴隸商人「流石！もし興味がありませんでしたらご一緒にどうぞ」

俺と尚文は奴隸商人に付いていった

奴隸のいる店へ

ついていくとサーカスがよく張っているテントにたどり着いた  
そのまま中へ

奴隸商人「こちらです」

「多いな。30は優に越えているな」

奴隸商人「見ただけで」

「空間把握が少し得意だな。たぶんもつといる」

これをして生活なんて……気味が悪い

尚文「それで？なんで俺が奴隷を欲しているの？」

奴隷商人「彼らは嘘をつけず主人を裏切れることも決してできないからです。奴隷には重度の呪いを施せるのですよ。命を代価にする刻印を使った強力な呪いをね。どうですか？」

尚文「いくつか見せてもらおうか？」

「尚文！やめとけ！」

尚文「邪魔するの？白夜」

「さつきも言ったがお前の現状はわかる。だが奴隷は」

尚文「そう言うなら白夜はここから出ればいい。俺は見る」

そう言い進んでいってしまった

「……………全く。もうなればあんなグレる事が出来るんだよ」

俺もついていくことに

奴隷商人から色々と聞いた

巫人と獣人の違い

使用用途の事も

まあ主に使われるのは労働が多いようだ  
それも過酷な



見ていくと

1人の奴隷に尚文は目にとまった

それは女の子の亜人

だが奴隷商人は

奴隷商人「お客様。こちらが当店おすすめめの奴隷です」

そう言い奴隷商人の近くにいる奴隷へ

奴隷商人「レベルは75」

尚文「(俺のレベルの20倍に近いな)」

??マークが

それ程今の俺達じゃあ扱えないというのとか

尚文「こいつはいくらだ？」

奴隷商人「何分戦闘において有能な分類ですからねえ…金貨15枚  
でどうでしょう?」

尚文「買えないのをわかって一番高いのを見せてるな?」

奴隷商人「ええ。あなたはいずれお得意様になるお方…目を養って  
いただかねばこちらも困りますゆえ。さて…一番の商品は見てもら  
いました。お客様はどのような奴隷がお好きですか?」

奴隷ね

クリスの事を思い出す

俺があいつと別れた後に捕まり奴隷に

……………思い出しただけで虫酸が走る

尚文「安くて言う事を聞く奴がいい」

奴隷商人「となると…亜人ですなあ。戦闘や肉体労働向きではなく  
なりますが」

尚文「戦力が欲しいなら育てる」

奴隷商人「面白い返答ですな、人を信じておりませんので…？」

尚文「奴隷は人じゃないんだろ？モノを育てるなら盾と変わらな  
い」

奴隷商人「ハツハツハツ、これはしてやられましたなあ」

「俺は気分が悪い。過去を思い出す」

奴隷商人「光の勇者様は過去に奴隷と？」

「何回かは会った事はある。それと俺自身なった事もまあそれは潜入  
でやった事だがな」

奴隷商人「それは!?!まさか経験があるとは。やはり間違いではない  
用ですね」

「ふっー」

尚文「(奴隷になった事がある…それに苦しい顔だな?)」

奴隷商人「こちらがお客様にご提供できる最低ラインの奴隷です。  
左から…」

尚文「顔を上げろ！」

奴隸商人「えっ？」

奴隸1「けほっ！けほっ！」

奴隸商人「そのラクーン種は、精神障害と病を患っておりまして…私も手を焼いているのです。以前の飼い主が拷問好きな男でして…おそらくそう長くは持たないでしょう」

尚文「決めた」

奴隸商人「え？」

尚文「この奴隸にする」

尚文が買う奴隸が決まった

「ならもう出よう。ここに居続けるのは気分g」

その時

グオオオオン

気配を感じ取った

この感じ…：…間違いない

今いた奴隸から9時方向から感じた

「なあ奴隸商人」

奴隸商人「はい？」

「あそこにいるのは？」

真っ直ぐ指差した

奴隷商人は俺が誰を指しているか理解した

奴隷商人「あれですか？この者と同じ亜人ですが？」

「見ていいか？」

奴隷商人「はい」

俺はその奴隷の元へ歩いた

奴隷2「……………っ？」

その奴隷の顔を見た

……………やっぱり

奴隷商人「この奴隷は元騎士で。部隊が全滅し用済みとなって最近私の所に」

「アリスなのか？」

奴隷2「っ!？」

奴隷商人「この者と会った事が？」

奴隷2「誰ですか？」

「客だ。…………商人。俺も買う」

奴隸商人「ありがとうございます！」

尚文「……………」

俺達は選んだ奴隸を買う事に  
すると

奴隸商人「今から奴隸紋を刻みます」

「俺達の血で契約だな」

奴隸商人「仰る通り」

「やり方を教えてくれ。あとは自分でやる」

奴隸商人「ですが」

「もし破られてもやり方がわかれば契約し直せるだろ？安心しろ……  
金はちゃんと払う」

奴隸商人「わかりました」

俺は奴隸紋のやり方を教えてもらった

奴隸商人は尚文の奴隸を

俺は自分で選んだ奴隸に奴隸紋を刻んだ  
すると

奴隸1 & amp; 2 「うっ!!」

尚文「おい」

「大丈夫だ尚文。定着までは苦しみが起きる」

奴隸商人「そう言う事です。これで貴方方には逆らう事は出来なくなりました」

すると

【契約完了】

どうやら終わったようだ

奴隸商人「これでこの娘はお客様のものです」

尚文「料金は銀貨30枚だな」

「俺の方は銀60だな」

奴隸商人「お二方1枚多いですよ？」

尚文「手数料だ。どうせ搾り取るつもりだったんだろう？」

奴隸商人「よくお分かりで…」

尚文「さて。お前の名前を聞いておこうか？ほら、名前を言え。名前は何？」

奴隸1「ラ……ラフタリア」

尚文「ラフタリア……行くぞ」

奴隸商人「またご来店をお待ちしています」

「もうちよい優しく出来ねえのか？尚文は。改めてだが……君は？」

奴隸2「……………言わなきや駄目なのだろ。アリスだ……………アリス・シンセシス」

「アリス・シンセシスだな。なら行こう」

アリス「何処に?」

「ついてくればわかる（見た感じ龍族か。それも人間に近い。龍の一部を隠してる。手練れだな）」

俺達は尚文の元へ向かった

奴隸商人「フフ…やはり選びましたか。私ゾクゾクしてきましたよ」

## 奴隷と波【中編】

あの後尚文と尚文の奴隷Ⅱラフタリアとアリスとの4人で飯を食べた

その後は尚文とラフタリアと別れまた別行動となった

「俺が作った方がうまいな。てか料理スキルとかあったりするのかわか？ あつたら満足に食べられないような……まあそこもあげればいいかわかん！」

アリス「なあ？」

「なんだ？」

アリス「あれは盾の勇者だろ？聞いた話じゃあ犯罪みたいだが？」

「な訳ないだろ。冤罪だよ冤罪！王族どもが馬鹿すぎるし腐ってやがる。俺の知ってる王族や王はどんな民でも大事にする。あいつらはごろつき以下だ」

アリス「……………」

「っ？なんだアリス？」

アリス「いや……勇者の言う台詞ではないなと思ってな」

「別に俺は勇者だからって理由で行動しないよ。俺は俺だ」

俺は武器屋のおっさんの所でアリスの防具と剣を買った  
慣らす為にフィールドにも出て戦った

やはり元騎士というのもあつて剣技はかなり高い



どことなく俺の知ってるアリスと似ている

これから何するかというと

まず他の勇者の元へ行こうと思った

が……鍛えなければいけないため1人だけにしようと考えた  
そこで白羽の矢がたったのは

「あの日以来か？」

？「お前か。何の用だ？」

「用があるから来たんだろ。鍊」

剣の勇者：錬の元に

錬「それでなんだ？」

「俺と付き合え。まずは話だ。タイマンで話そう」

そう言い人気の無い所へ移動した

錬「なんだ？白夜」

「錬……お前は尚文があんな事やったって信じてんのか？」

錬「何を？」

「いいから答えろ」

錬「……………あの場ではああ言ったが……正直何かあるかと思った」

「勘か？」

錬「ああ」

「実はな」

俺はあれが王族……この国が盾の勇者を嫌っているという理由ではめたことを錬に話した

錬「っ!?!?どういう事だ！そんなの八つ当たりだろ！」

「お前もそう思うか。確かに過去に盾の勇者が何かしらやった事がきつかけなんだろうが…それは尚文に向けても仕方がない。と言つても…俺もそんなに前の勇者については知らないから思いつきし推測で話しているが」

鍊「いや…その可能性はあるだろう。まさか国絡みとはな」

「それと鍊…お前のスキルの欄にノイズの様になってる所はないか？」

鍊「ノイズの様な？…いやないな」

「そうか（俺だけなのか？）」

鍊「それだけか？」

「いや。1度お前と戦いたいと思つてな」

鍊「白夜と？」

「駄目か？」

鍊「駄目ではないが」

「んじゃあそうと決まれば！」

俺はアリスのいる所へ向かった

鍊「おいー！」

アリスと錬のパーティーメンバーには手合わせすると言うと了承してくれた

「じゃあやるか」

錬「別にいいが。白夜のレベルは？」

「俺か？……15だな」

錬「俺は26だ。結果は明白だろ？」

「実力はレベルじゃあわかんねえぜ？」

俺はアリスにアイコンタクトした

アリスはそれを理解し

アリス「それでは！剣の勇者錬様と光の勇者白夜様の模擬戦を始めます。ルールは相手を死なせてはならない。どちらかが降参…または止めと言われたらそこで終了。時間は無制限です」

錬「……………」

「やりますか」

アリス「それでは」

錬「……………」

「I<sup>身</sup> have<sup>体</sup> the<sup>は</sup> bone<sup>で</sup> of<sup>で</sup> my<sup>で</sup> sword.<sup>る</sup>」

アリス「始め！」

赤い服へ見に纏った

錬「っ!?! (服装が変わった?)」

「<sup>ト</sup>投影…<sup>オ</sup>開始!」

干将莫耶を出し斬りかかった

だが錬はそれを受け止めた

キイイイイイイイン  
!!!!!!

「受け止めたか」

錬「なんだそれは？」

「これか?…昔着てたやつだよ!」

力を入れ押し出した

錬「っ!はあああ!!!」

次に錬が攻める

だが軽く受け流す

最小限の動きで

錬「(無駄の無い動き乱れてない)」

ドゴッ!

錬「うっ！」

錬の腹に蹴りを入れ吹き飛ばした

「別に蹴るなどは言われてない。だろ？錬」

錬「くっ……そうだな」

その後錬との手合わせは俺が勝った

まあ当然ちや当然だが

剣技は俺の方が断然上だし

負ける要素が全く無いしな

「俺と戦ってみてどうだった？」

錬「全く隙がなかった。レベルじゃあわからない。こういう事か」

「もつと実力を積み上げれば最小限の動きでかわせることができるし  
剣を自由自在に動かせる。錬はまだ発展途中だ。俺のは化け物じみた  
もんだからな。気にすんな」

錬「そう…だな（結局一発も…少しも当てられなかったな）」

「それじゃあな。課題面…ちゃんと克服しろよ」

錬に尚文についてと錬自信について教え俺達は強くなるために別  
れた

それから何日か経った頃

「インパクト！」

野宿をしながらレベル上げをしていた  
それと

アリス「はああああ!!」

スパン!

アリスのレベルも上がっていった

ちなみに俺達の現在のレベルは

白夜：43

アリス：40☆

アリスの方が高かった

まあ騎士をしていたから元々高かったし

ちなみにアリスを買った時のレベルは21

俺やられるんじゃないかね?とか思ったよ

そう言えば星がついたな

シスターの話じゃあこれが付いたら砂時計へって言ってたな

行ってみるか

「アリス！今から龍刻の砂時計へ行く」

アリス「わかった。ハクヤ」

何故呼び捨てで尚且つタメなのか

理由は簡単

俺がそうして欲しいと言ったからだ

そうじゃないとなんか気持ち悪いし

俺とアリスは龍刻の砂時計へと向かった

龍刻の砂時計

「アリスはどうなりたい？」

アリス「私か？……今よりもっと強くなりたい。そうは思ってる」

「なら攻撃力アップか？」

アリス「それもだが……スピードにしようと思う」

「何故？」

アリス「ハクヤと剣の勇者との戦いでわかった。私は攻撃力は高いが速さが足りない。そう思ってた」



「単純な理由ね」

アリス「悪いか？」

「そうじゃないよ。いいと思う」

そんな話をしていると

尚文「白夜か」

「っ！尚文！お前もか？」

尚文「まあ……そうなんだが」

？「あなた方は……っ！あの時の」

「？……もしかして……ラフタリア？」

ラフタリア「はい！お久しぶりです光の勇者様。それと」

アリス「アリス…アリス・シンセシスだ」

ラフタリア「アリスさん…ですね。お久しぶりです」

アリス「久しぶりだな」

「それでももうやったのか？」

尚文「いや…それが」

？「盾の勇者一行はクラスアップが出来ません！」

その声を聞いてイラツと来た

「っ！マルティか…」

マルティ「っ！…ハクヤ様もいたのですね」

元康「白夜か。尚文？まだそんな装備か？」

「槍てめえ」

元康「まだ怒ってんのかよ白夜」

「当たり前だ！仲間の意見を簡単に信じやがって。疑うというのを覚えろ」

元康「仲間を疑うのはいけない！仲間は信じきらないと」

「女は…だろ？…だから向こうの世界で女に刺されるんだお前は！」

マルティ「っ！ハクヤ様！ハクヤ様であつても良い事と悪い事があります」

「お前がそれを言うか！…まあいいなあシスター」

シスター「はい！」

「尚文は……盾の勇者のクラスアップとかはやってくれるんだろうな？」

シスター「っ！」

「そうか。本当に腐りきってやがる……………アリス…悪いが」

アリス「大丈夫だ。ハクヤ…お前の気持ちはわかる。お前の好きな様にすればいい」

「悪い」

すると

樹「尚文さん…白夜さんも」

鍊「白夜…」

「尚文…時間あつか？」

尚文「……………あああるが？」

「なら来い！話がある」

俺達は尚文達を連れていった

樹「波で会いましょう」

「ああ」

鍊「足を引っ張んなよ？」

「お前もな鍊」

鍊「ふっ」

鍊が笑った？

いい笑顔じゃねえか

俺は武器屋のおっさんの所へ向かった

武器屋

「おっさん」

武器屋のおっさん「あんちゃん達か。どうした？」

「話せる所がここしかなくなてな。いいか？」

武器屋のおっさん「まあいいが」

「尚文」

尚文「なんだ？」

「俺達と組まないか？」

尚文「えっ？」

ラフタリア「ハクヤ様？」

「ラフタリア達と会う前に話してたんだ。組む話を……波の時だけもいい………どうだ？」

正直……今の尚文にその選択肢があるかわからない  
でもかけるしか

ラフタリア「尚文様……」

尚文「っ………わかった……波の時だけだ」

「っ！ありがとう」

尚文「それで？……どうするんだ？波までそんなに無いぞ？」

「波まで約半日しかない。とりあえず……連携を取ろう」

尚文「合同で1度フィールドで戦うんだな」

「そうしねえともし俺とアリス……尚文とラフタリアのペアが逆になった場合対処できるようにする為だ」

尚文「だな。白夜……お前の戦闘スタイルは？」

「基本は格闘や剣技。遠距離も出来るが」

尚文「なんでも出来るんだな……。なら基本スタイルでもらつて構わない」

「わかった。後は……。1度やった方がいいな」

尚文「だな」

俺達は時間が許す限りレベル上げ・連携を試していった

1番よかったのは俺と尚文ペア

尚文は盾というのもあり守りは強い

俺はゼロや投影魔術を使い応戦する

アリスとラフタリアのペアも悪くない背中を預け信頼している

こんな早く預けるのは剣士同士だからなのか

それは定かではないが

俺はレベルが上がり45に

尚文は25

ラフタリアは29になった

アリスはクラスアップをしておらず上がりはしないものの剣技は上がっていた

日が落ち明日に備えてポーションを買ってこの日は終わった

そして翌日の朝

武器屋のおっさんに呼び出された

武器屋のおっさん「似合ってたんじゃないか！」

アリス「こ……これは？」

ラフタリア「ナオフミ様にぴったりです！」

「ぶっ！くっ！」

尚文「笑うな！白夜！……おっさん……これどっからどう見ても盗賊にしか見えないんだが？」

武器屋のおっさん「良いものだぞ？名付けて！【蛮族の鎧】だ」

「ははははっははははは！！」

尚文「笑いすぎだ白夜！」

「はあ……はあ。悪い悪い！おっさん……これってオーダーメイドか？」

武器屋のおっさん「おお！光のアンちゃんのも作るか？」

「考えとくよ。さてと……そろそろ時間だな」

武器屋のおっさん「頑張れよ！盾のアンちゃん！光のアンちゃん！」

「白夜だったの。ああ………行ってくる！」

そう言い俺達は波の戦場へと転送された

## 波の戦場

「着いたか。……………っ……………あれが…波」

空には禍々しい色になっていた

「みんな。たぶんあいつら3人はボスの所に行った。俺達は近くに集落があるか探す。もしあったらそこに行って守る…いいな！」

アリス & ラフタリア「ああ！（はい！）」

尚文「あれは!？」

ラフタリア「ナオフミ様…『リユート村』です」

「知ってるのか？」

尚文「1度行った村だ。っ？」

前方には煙幕が

救援の煙幕だろう

「兵が来るまでは持ちこたえられない。行こう！」

尚文達「ああ！（はい！）」

俺達は近くの村…リユート村へと向かった

これが俺達にとって最初の波の戦いだ



## 奴隷と波【後編】

俺達は近くの村：リユート村に着いた

「尚文達は村人達を。俺達はモンスターを!!」

尚文「わかった！ラフタリア」

ラフタリア「はい！ナオフミ様」

頑張れよ…尚文

さてと

「俺にとって……この世界での初戦闘だ。行くぞアリス！」

アリス「わかっている！」

「ゼロ!!」

ゼロを発動させた

「行くぞ……下等共。蹂躪の時間だ」

なんてな……やりますかねえ!!

初撃はインパクト

ゼロの力を込められた技

もつと言えば初級の技になる

その一撃で10体は倒した

「まだまだだな」

スパ!

アリス「そうでもないだろう。一撃を放っただけであの威力。強いなハクヤは」

「茶化すな。まあ強くないといけないし：アリス」

アリス「なんだ？」

「俺はこいつらより大物の所に行く。言い方は悪いが…」

アリス「雑魚処理だろ?…いい!その代わり今度は私だ。いいな?」

「わかった。頼む!アリス!!」

俺は跳躍で遠くまで跳んだ

アリス「光の勇者……か」

村中央

「ゼロインパクト!」

大柄のモンスターを瞬殺した

「よしー！」

尚文「白夜！」

「さっきぶりー！アリスはアンデットの相手をしてもらってる」

尚文「そうか。……それが白夜の」

「ああ。俺の力だ。っ!?後ろだ！」

尚文「っ！エアストシールド！」

よしー！

俺はデカブツの後ろに回り込み

「ぶっ飛べー！ゼロバスター!!」

砲撃を50度の角度で放った

俺の砲撃技の1つ

「おっけえだな」

尚文「悪い白夜」

「良いって…それよりよく反応できたな」

尚文「白夜が言ってくれたからだ」

「そっか（それに硬い。まともによればもつと強くなる筈なのに。この国のやつらと来たら!）」

すると

「っ?」

尚文「どうした? 白夜」

まづい!

「尚文! ラフタリアを守れ!」

俺は全員集まっている村人の中央に行った

村人爺さん「勇者様?」

「伏せろおおおお!!」

すると

火の玉が襲ってきた

尚文「エアストシールド!」

尚文はラフタリアを側で守った  
俺も

「I <sup>身</sup> have <sup>体</sup> the <sup>は</sup> <sup>剣</sup> bone <sup>で</sup> of <sup>で</sup> my <sup>ぎ</sup> sword. <sup>て</sup> <sup>い</sup> <sup>る</sup>」

ゼロの姿と投影魔術の赤い服がうまい具合に合わさった姿に  
そして

「<sup>ゼロ・アイ・アス</sup>白銀の守護盾！」

村人全員を守る程の巨大な白銀の盾が現れた

尚文「盾の防御技!？」

何とか間に合った

少しして収まり

?「一掃できたか。っ?盾がいたか……っ?!?光の勇者様も!？」

「みんな大丈夫か？」

村人爺さん「はい」

俺は誰がやったかわかる

王国騎士だ

「何の真似だ!!まだ人々はいるんだ!そんな中攻撃するとはどういう事だ!」

王国騎士団長「いえ!そんな事は」

「ふざけるのも大概にしるよ?俺1人でもお前らを滅ぼす事なんぞ簡単だ!!」

すると

モンスター「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!!」

騎士団長の真後ろに現れた

全く

ガシツ!

「足手まといだ! さっさと行け!」

王国騎士団長「はい! ……お前ら行くぞ!」

だが1人の騎士は

男性騎士「盾の勇者様と光の勇者様を守れ!」

陣を組んだ

へえー……このくそ国にまともな奴がいるんだな

すんませんでした!

さてと

「騎士のみんなは村人を守ってくれ。俺と盾の勇者はモンスターを」

男性騎士「わかりました」

各々の役割を果たしていった

あれから時が経ち、なんとか波に耐え抜いた

「お疲れ尚文」

尚文「ああ。まさか王国の騎士が加勢するなんて」

「みんなあんな奴等じゃないって事だ。良い奴もいる」

尚文「……………」

「……………」

まだ疑ってる……………しやあねえけどさ！

アリス「ハクヤー！」

「アリス……………お疲れ……………どうだった？」

アリス「こっちは全て片付いた。だがまだいるかもしれない。警戒しといた方がいい」

「だな」

ラフタリア「アリスさん…光の勇者様」

「白夜でいいよラフタリアさん」

ラフタリア「……………わかりました！ハクヤさん」

その後連絡部隊が来て波に参加した者全員祝いの宴に参加する事  
と  
そう参加した全員だ

王宮・宴

よく騒ぐな……呑気すぎる

鍊「白夜」

「鍊か。お疲れ」

鍊「ああ。白夜のアドバイスを受けてあの日以来やってる」

「そうか」

鍊「アドバイスありがとな白夜」

「どういたしまして」



鍊はパーティーメンバーの元へ戻った

アリス「あの男は信念は強い。だがまだ未熟だ。心配だな」

「へえ……元騎士団長様が心配事を？」

アリス「からかうな！」

そう……アリスはこの王国の元騎士団長だった

女王候補のマルティが気に入らなかつたらしく権力でアリスを騎士団長を降ろされた

その後奴隷へと

アリスは亜人だが人間よりでちゃんと見ないと龍族の鱗等が見えない

それほど人間感が強い

俺は尚文とラフタリアの元へ向かった

だが

元康「おい！尚文！」

「元康……」

元康「聞いたぜ……お前と一緒にいるラフタリアちゃん……奴隷なんだってな」

尚文「それがどうした？」

元康「っ！……俺達は勇者だ！勇者が奴隷をかうなんて！」

ラフタリア「ナオフミ様h」

横から手で庇うような感じで入っていった  
その手の主は

「落ち着けラフタリア」

ラフタリア「ハクヤさん!？」

「元康。お前……今の尚文の状態わかって言ってるんだよな?」

元康「わかるも何も……尚文はマインに手を出した最低な男だろ」

イラッ

我慢

「あん時も言ったが誤解だ!……こいつは何もしてねえ!」

元康「マインの話じゃああの夜……白夜は尚文と別れたって聞いた。  
尚文が無実という証拠がない」

イラッイラッ

「……………お前は女好き……………騙されてるって事を自覚してねえのか  
?」

元康「それとこれとは関係ないだろ。俺は仲間を信じてるんだ!」

イラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイ  
ラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイ  
ラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイ  
ラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイラッイ

ラッ

ブチッ!

何かがキレた感じがした  
それをアリスが感じた

アリス「あっ……やばっ」

「我慢の限界だっ!!……そんな事言うなら決闘するか？」

元康「お前は関係ないだろ？」

「あるな。おいマルティ！……お前がラフタリアが奴隷を言ったな  
？」

マルティ「そうです……それが？」

「お前は知ってる筈だ……俺の仲間も奴隷だつて事をな」

元康「なっ!?!白夜……冗談だろ？」

「アリス……悪いが刻印を見せてくれないか？」

アリス「……ああ問題ない」

アリスは刻印がある胸を見せた  
そこにはラフタリアと同じ模様の奴隷紋が

元康「これが!……本当なんだな」

「ああ。だがまずは尚文とだ。その後俺。俺はすごくイラついてんだ。てめえの槍ごと潰してやる!……今のを聞いたな?……才

ルトクレイ王？」

オルトクレイ「……………ああ。その場合……………お主達の奴隷を一旦預かるがよいか？」

「問題ない……………いいな？アリス」

アリス「私は問題ない。ラフタリアは？」

ラフタリア「私は」

尚文「……………」

ラフタリア「……………わかりました。ハクヤさんとナオフミ様を信じます」

「……………同意したぜ。これでいいだろ？」

俺達は各々の場所へ向かった

尚文「どういうつもりだ？白夜！」

「こうでもしねえとおさまんねえ。終いには無理矢理にでも来ると思ったからな」

尚文「っ……………確かにそうかもだが。俺は一言も！」

「じゃあラフタリアをはいどうぞ！と渡すか？」

尚文 「……白夜………なんでそんなに」

「俺は自分の仲間が傷つくが嫌なんだ。もう泣いてほしくない……絶望してほしくない。………ただそれだけだ」

その時尚文の脳内に俺が体験した辛い出来事いくつかが流れた  
その中にはアリスそつくりの騎士もいた

尚文 「っ!?!?………なんなんだ?………今のは」

尚文は知らない

マスター 主人がサーヴァント使魔と契約したら………そのサーヴァント使魔の過去の記憶を見れ  
てしまう事に